

1月4日から、3月のお彼岸(3月19日)まで、うちの喫茶店は冬眠にはいる。店が急坂のてっぺんにあるため、道路の凍結がきびしくアクセス困難なためと、マイナス15度以下の気温がつづくパンの発酵がままならないためというのが、冬眠の理由なのだが、もうひとつの理由は、翻訳に集中する時間を確保するためだ。

その80日間という長い定休日の間、旅行もするし、ビデオ映画三昧というのも、まちがいない過ごし方ではあるが、基本的に、わたしはヘブライ語を軸にして暮らしたい。

原語と日本語の背景にある、ふたつの文化を学ぶという壮大なカリキュラムは、たとえ一年中穴蔵にいても、学びきれものではないし、試練ばかりがつづく、ついつい、めげそうになる。どの仕事もそうであるように、この道も艱難辛苦の連続で、いたく険しい。

年齢はともかく、自分は喫茶店のママなので、右手でコーヒーを落とし、左手で紅茶をこすことは、なんとかできる。ところが、右の耳で喫茶店の接客をして、左の耳で文学や翻訳の話を聴くことは、どういうわけかできない。出版社の編集者がとつぜん店にみえたと、しどろもどろになって、申し訳ないほどトンチンカンな対応をしてしまう。だから、長い冬眠中は、左の耳だけに集中する貴重な時間だと、一日一日をありがたく味わうことにしている。わたしの左の耳が、しばしの間、貝の耳になりますように。